

いずっぱこの軌跡

明治 26 年 (1893)

豆相鉄道株式会社設立

明治 31 年 (1898)



三島駅 (現御殿場線下土狩駅) ~
南條駅 (現伊豆長岡駅) 開通

明治 32 年 (1899)

南條駅 (現伊豆長岡駅) ~大仁駅開通

明治 33 年 (1900)

北條駅 (現葦山駅) 設置



大正 8 年 (1919)

駅の名称変更①南條駅→伊豆長岡駅
②北條駅→葦山駅



昭和 9 年 (1934)

丹那トンネル開通に伴い、起点を旧
三島駅 (現御殿場線下土狩駅) から現
三島駅に移転、現在の駿豆線となる



昭和 32 年 (1957)

社名を「伊豆箱根鉄道株式会社」に変更

昭和 33 年 (1958)

狩野川台風で甚大な被害を受ける
(11 日後に全線復旧)



昭和 48 年 (1973)



日本初のシルバーシート導入

平成 29 年 (2017)

創立 100 周年記念セミナー開催



平成 30 年 (2018)

鉄道開通から 120 周年



伊豆仁田駅



伊豆長岡駅



三島駅



修善寺駅

地域の足「いずっぱこ」
愛され続けて開業120周年

問合先／企画財政課 (979・8101)

三島市・田方広報研究会共同編集

三島〜修善寺間を結び、私たち地域住民の日常生活に欠かせない「地域の足」として、日々運行する伊豆箱根鉄道駿豆線(通称「いずっぱこ」)。そのいずっぱこが、平成30年(2018)で、前身となる豆相鉄道開業から数えて、120周年を迎えました。

「いずっぱこ」は、県内初の私鉄「豆相鉄道」として、明治31年(1898)に開業しました。開業当時、駅は三島町駅(現三島町駅)、大場駅、原木駅、南條駅(現伊豆長岡駅)の4駅のみ。現在の形となったのは、開業から36年後、昭和9年(1934)のことでした。

120年もの間、地域住民とともにあり続けた「いずっぱこ」。現在も変わらず、通勤・通学を行う地域住民や、沿線沿いの観光地を訪れる観光客など、さまざまな人たちが日々利用する「いずっぱこ」。

今回は120周年を記念し、「いずっぱこ」の変遷に迫りたいと思います。

※田方広報研究会は、伊豆市、伊豆の国市、函南町、JA伊豆の国、伊豆保健医療センターの各広報担当で構成されている広報研究会です。今回の特集は、三島市を含めた伊豆箱根鉄道駿豆線沿線市町による共同編集です。

※古い写真の一部は、伊豆箱根鉄道(株)から提供されたものです。



平成 30 年 (2018)



昭和 2 ~ 3 年 (1927 ~ 1928)

三島駅

旧三島駅は、明治 31 年 (1898) 開業。現三島駅になったのは、昭和 9 年 (1934) のことです。
伊豆の玄関口の 1 つとして、昭和 8 年 (1933) からは、東京から直通列車が乗り入れられています。

電車

開業当時は、蒸気機関車で運行していました。また、三島市から沼津市を結ぶ軌道線 (路面電車) も運行していました。



平成 30 年 (2018)



平成 30 年 (2018)



平成 30 年 (2018)



明治 31 年 (1898)



大正 7 年 (1918)



昭和 38 年 (1963)

伊豆仁田駅

大正 11 年 (1922) 開業。田方農業高等学校の生徒をはじめとする通学や通勤の利用者が多く見られます。



平成 30 年 (2018)



昭和 45 ~ 55 年 (1970 ~ 1980)



平成 30 年 (2018)



大正 2 年 (1913) 頃

大仁駅

明治 32 年 (1899) 開業。大正 2 年 (1913) 当時は、修善寺・天城湯ヶ島方面に向かって馬車に乗り継ぐ拠点として機能していました。

修善寺駅

大正 13 年 (1924) 開業。修善寺や天城湯ヶ島、西伊豆へのバス、タクシーの乗り換えターミナルとして機能しています。平成 26 年 (2014) に現在の駅舎となりました。



平成 30 年 (2018)



昭和 58 年 (1983)

いずっぱこの今昔

地元の人に聞く
いずっぱこの思い出

昭和 30 年代にこの地で商売を始めました。昭和の終わり頃までは駅前にも小売店がたくさんあり、にぎわっていました。平成に入ってから大型店舗が増えた影響などで次第に数が減り、駅周辺は少し寂しくなりました。

それでも多くの人が通勤や通学で伊豆仁田駅を使い、人の流れは昔も今も変わらず続いています。私も高校への通学や三島・修善寺方面に出かける際に利用し、多くの思い出を作りました。



秋山米店
店主 秋山和義さん

2020 年の東京オリンピックに向けて海外から訪れる人の利用も増えてくると思います。地域の人だけでなく、旅行者にとっても思い出に残るような「いずっぱこ」になるよう期待しています。



沿線の高校生に聞く！「いずつぱこ」の魅力

「大還暦列車」 未来へ運ぶ

日本大学三島高等学校 新聞部

この夏、私たち新聞部は、伊豆箱根鉄道、通称「いずつぱこ」の各駅に下車し、駅周辺のスポットに出かける旅をした。「いずつぱこ」はさまざまな場所へ運んでくれた。

大仁駅を出ると、目の前に足湯がある。試しに浸かってみると、横に立つ看板に「長嶋茂雄ロード」と書かれている。元読売巨人軍の長嶋茂雄さんは、現役時代の昭和42年から昭和48年まで、旧大仁町で自主トレーニングを行っていた。この事実を現在、何人の若者が知っているだろう。私たちは、看板を頼りに周辺を歩いた。「いずつ



看板を頼りに周辺を歩く

ぱこ」はいつも、こんな風に、思いがけない場所へ連れて行ってくれる。伊豆箱根鉄道の前身となる豆相鉄道

が120周年を迎え、これまで「いずつぱこ」は変わりゆく沿線地域の景色を車窓越しに語り続けてきた。しかし、私たち高校生は、その20年にも満たない歴史しか知らない。

少子高齢化が進み、通学や日常の足として「いずつぱこ」を利用する学生数は減っていく。しかし、人々の足だけでなく、地域の歴史を連結し、過去を今に、今を未来へと運んでくれる、地域の『大還暦列車』としてこれから



日大三島高校新聞部の皆さん

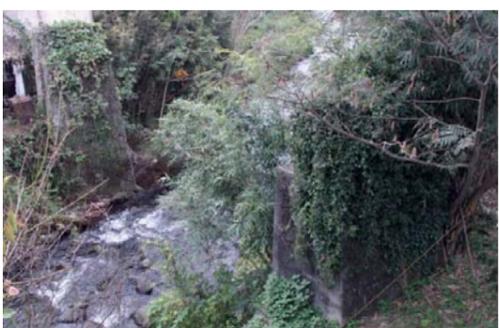
豆知識

大場駅と函南駅をつなぐ路線？

大正7年、鉄道省が駿豆鉄道（現：伊豆箱根鉄道）大場駅から丹那トンネルの西口までをトンネルを作るための工事用として軽便鉄道（一般的な鉄道よりも規格が簡便で、安価に建設された鉄道）を敷設しました。当時は、蒸気機関車で丹那トンネルに工事用の機械や、木材、レンガなどの資材を運搬したり、トンネル工事の電力確保のために建設された大竹火力発電所に石炭を運搬したりしました。

丹那トンネルが完成した昭和9年に廃線となり、当時は函南駅建設前であったため正確には大場駅と函南駅を繋ぐ線路ではありませんでしたが、資材だけでなく客車を付けて労働者やその家族を乗せ、大場駅と丹那トンネルの西口を繋ぎ住民の足としても活躍しました。

丹那トンネルの西側に位置しているのが正式名ではありませんが「西口軽便線」と呼ばれていました。現在は、その面影はほとんどなく、大竹交番付近にある川に架かっていた橋桁を支えた橋台のみとなっています。



▲現存する橋桁

座談会

蕪山高校生に聞く！「いずつぱこ」の魅力

県立蕪山高等学校 写真報道部

蕪山高校写真報道部では、蕪山生233人を対象とした駿豆線利用に関するアンケート調査を実施。その結果をもとに、座談会を行いました。その一部を紹介いたします。

○ 利便性の向上を実感

Aさん 3月のダイヤ改正で17時〜22時の電車が15分おきになり、わかりやすくなった。夜の本数も増えて、帰宅時に助かっているよ。
Bさん 観光客呼び込むためにもICカードを導入して利便性を高めるべきだと思うな。

Bさん でも、エリアをまたいでの利用ができないという現状があるよね。
Cさん 停電時の対応が早く、すぐに復旧したのを覚えているよ。年に数回行っている避難訓練の成果が出ているんじゃないかと思った。

○ 駿豆線の良さは？

Cさん あまり速くないから、田園風景を楽しむことができるのかな。

Aさん 確かにそうだね。

Cさん 旅という目線から見ると素晴らしい鉄道だと思うな。

Dさん 三島方面から通学している人は、一度修善寺まで乗ってみると違った良さを見つけられると思うよ。

Bさん 運休しない、安定性のある駿豆線は、私たちの生活に必要な不可欠だね。

司会 皆さんにとって愛すべき「いずつぱこ」ですね。今日はありがとうございました。

※蕪山新聞（平成30年9月30日発行）から抜粋



蕪山高校写真報道部の皆さん

特集記事掲載に寄せて

このたびは、三島市・函南町・伊豆の国市・伊豆市の広報紙に当社駿豆線の特集していただき、誠にありがとうございます。

当社は、大正6年（1917）11月5日、駿豆線と、かつて沼津駅と三島広小路駅を結んでいた軌道線、この2つの鉄道路線の事業を富士水電株式会社から譲渡され、事業を開始いたしました。おかげさまで、昨年には100周年を迎えることができました。さらに、本年は、駿豆線が開業120周年を迎えるという節目の年ともなります。

地域の皆様をはじめ、ご愛顧いただきましたすべての皆様に、深く感謝申し上げます。

振り返りますと、100年の間には、点と点を結ぶ鉄道から、さらにその先をつないでいくバス・タクシーの公共交通事業などに事業を拡げてまいりました。

もちろん、この間には、昭和33年（1958）に狩野川台風の災害に見舞われるなど苦しい時期もありましたが、そのたびに地域の皆様やご利用いただいているお客様の深いご理解をいただき、今日歩んでいるものと、あらためてここに深く感謝申し上げます。

この節目の年にあたり、社員一同、これからもこの地域の皆様と一緒に歩み、地域の活性化のために力を尽くしてまいりたいと考えております。そのためには、何より安全安心を第一に、これからも皆様から信頼され、地域になくならないような存在であり続けよう、決意を新たにしております。

今後とも皆様のご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。



伊豆箱根鉄道株式会社
代表取締役社長 伍堂文康